

小樽 文学散歩 map



市立小樽文学館

「小樽文学散歩 map」について

小樽は明治以降、北海道の経済中心地として非常に栄えました。現在も当時の面影を残しており、毎年多くの人々が観光のために小樽を訪れています。その一方で、小樽は産業の街であると同時に文学の町でもありました。石川啄木、小熊秀雄、小林多喜二、伊藤整など、小樽にゆかりのある文学者は数えきれません。さあ、小樽の街を歩いて彼らの足跡を辿ってみましょう！

モデルルート

- 市立小樽文学館
- ↓ 1min
- 旧色内駅
- ↓ 5min
- 旧北海道拓殖銀行小樽支店(似鳥美術館)
- ↓ 6min
- 石原裕次郎音楽碑(小樽運河)
- ↓ 10min
- 北海製罐小樽工場第三倉庫
- ↓ 20min
- 石川啄木歌碑(小樽駅前)
- ↓ 11min
- 旧小樽日报社(本間内科医院)
- ↓ 1min
- 旧衣斐質店(藪半駐車場)
- ↓ 15min
- 石川啄木旧居(た志`満)
- ↓ 15min
- 石川啄木歌碑(水天宮境内)



所要時間目安 約1時間半

1

C-4 市立小樽文学館

1978年開館。
小林多喜二や伊藤整、石川啄木など小樽にゆかりのある文学者の展示を中心としている文学館。文学者達と小樽の関係を深く知ることができます。ここで彼らについて知ったのならば、準備は万端。小樽に息づく彼らの足跡を辿る冒険の始まりです！



C-4 旧色内駅



小樽文学館の目の前にある旧手宮線の駅。1912年に開設され、1943年に廃止されました。駅舎は当時のものではありませんが、旧手宮線の線路が一部残されています。

旧日本拓殖銀行小樽支店や日本銀行旧小樽支店などが集まる色内銀行街にほど近い場所に位置しており、小林多喜二も出勤するためこの駅を利用していたようです。

2

小樽文学散歩 map

2025年8月2日発行

発行：市立小樽文学館

制作：笹原誠吾、沼倉結月、山中葉奈子

B-4 旧北海道拓殖銀行小樽支店



北海道拓殖銀行小樽支店は1923年、小樽経済の絶頂期に建築されました。小林多喜二は1924年から5年間この銀行に勤めていました。彼の初任給は70円だったそうです。彼は拓銀で働く傍ら、執筆活動にも精力的に取り組みました。

この支店は1989年に閉行し、一時ホテルとして利用された後、2017年からは似鳥美術館として利用されています。

B-3 石原裕次郎音楽碑(小樽運河)

小樽運河沿いの素敵な歩道の小樽駅側、その壁面の一部には昭和の大スター石原裕次郎の「おれの小樽」(作詞 杉紀彦、作曲 弦哲也)という歌の音楽碑が刻まれています。石原裕次郎は幼年期をこの小樽で過ごしていました。「おれの小樽」には彼が心に抱いていた小樽への思いが込められています。



3

B-2 北海製罐 小樽工場 第三倉庫

小林多喜二の小説「工場細胞」の舞台となった北海製罐が所有していた工場群の一つ。第三倉庫は1924年に竣工され、現在までその威容を残しています。かつて小樽運河は小樽の産業の中心地であり、常に労働者で溢れていました。多喜二は小樽運河で働く人々の過酷な現実を目の当たりにし、プロレタリア作家として多くの作品を残しました。



多喜二は小樽運河で働く人々の過酷な現実を目の当たりにし、プロレタリア作家として多くの作品を残しました。

D-3 石川啄木歌碑(小樽駅前)



小樽駅の傍ら、三角市場へと向かう道にある歌碑。石川啄木の歌集『一握の砂』から小樽を去る啄木が小樽に残る妻子に思いを寄せた歌が刻まれています。この歌碑は当時北海道帝国鉄道管理局中央小樽駅(現小樽駅)の駅長であった啄木の義兄山本千三郎が住んでいた官舎跡に建てられました。

啄木も小樽滞在当初、最初の住居を間借りするまではここで暮らしていたようです。この歌碑は、期成会(小樽啄木会等)により平成17年に建立されました。

4

D-3 旧小樽日报社



石川啄木は1907年9月末から12月まで、この小樽日报社に勤務していました。彼は記者として熱心に仕事をしており、自身が書いた記事の切り抜きを『小樽のかたみ』と名付けて残すほど思い入れを持っていました。

しかし、社内の争いなどにより12月には小樽日报社を退社し、明治41年1月19日小樽を離れ釧路へと向かうこととなったのです。

D-4 旧衣斐質店

伊藤整が小樽高等商業学校の学生だった時代に、同人誌「青空」の復刊資金捻出のため友人の川崎昇と商売をする際に宿として利用した場所。伊藤整の自伝小説である『若い詩人の肖像』には、彼が花園通りで夜店を開いて高等商業学校で作られた高商石鹸や彼の実家の薔薇などを売った後、衣斐質店の二階を借りて売り上げを計算した様子が描写されています。一晩で2円程の利益が出たそうです。



5

D-6 石川啄木旧居

小樽在住時における石川啄木の最初の住居。南部煎餅屋の二階を間借りしていました。啄木は小樽に滞在した115日の間に、一度住居を変えています。この住居に住んでいたのは、1907年10月2日から11月6日までのわずか1カ月間でした。



B-6 石川啄木歌碑(水天宮境内)



水天宮の境内にある歌碑。石川啄木の歌集『一握の砂』に収められているこの短歌は、啄木が小樽在住時を回顧して詠んだものです。啄木が小樽に滞在した期間は非常に短いものでしたが、一連の歌からは啄木が小樽へと抱く想いの深さが窺えます。この歌碑は小樽親潮会によって1980年に建立されました。また、水天宮境内には啄木の他にも詩人河野文一郎や俳人三ツ谷諷村など小樽とかかわりが深い文学者の碑が建立されています。

6